多文化共生を展望する実践者の力量形成と学び合うコミュニティ

福井県の取り組みに立ち会うなかで

半原芳子（福井大学連合教職大学院）

日本の多文化共生のこれまで

1980年代以前

日本は他国と比べ相対的に単一民族・単一文化国家と見なされつつも，在日韓国・朝鮮の人々やアイヌ民族の方たち，沖縄の文化など多様性があり，その継承は今なお課題。

1990年代

1990年の**入管法改正**により，日系ブラジル人等への定住者ビザが拡大。日本で仕事をする外国人が増加。日本社会で外国人住民と共生する必要性が議論され始める。

1995年の**阪神・淡路大震災**では，外国人被災者への対応の遅れが指摘され，多文化共生の必要性が浮き彫りとなる。

2000年代

総務省が「**多文化共生の推進に関する研究会**」を設置。「**地域における多文化共生推進プラン**」が策定され，自治体レベルでの取り組みが本格化する。

2020年代

技能実習生や特定技能制度の拡大により，日本で働く外国人が増加。全国の自治体で多文化共生に係る取り組み（日本語教育支援を含む）が展開中。

多文化共生に向けて

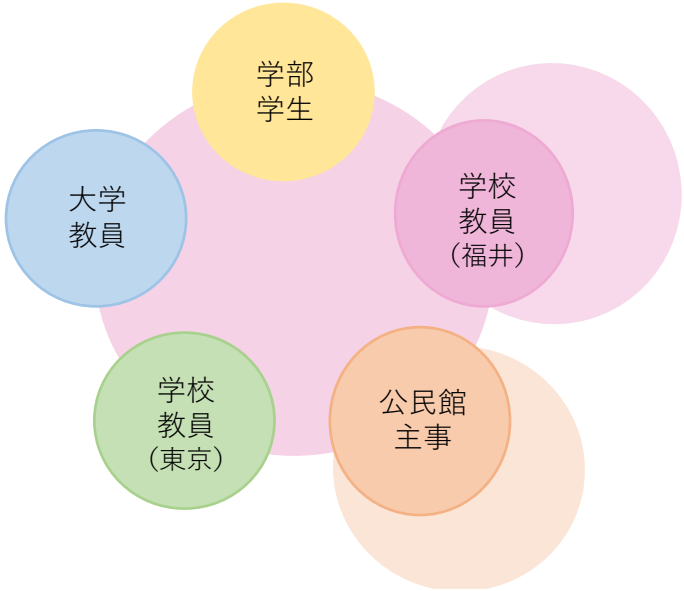
- 多様な文化の共存と共生は，息長く，長期的な展望が必要となる課題

- 福井県多文化共生推進プラン（令和３年３月）
  「誰もが主役のふくい」
  すべての人が輝き，互いに支え合い，幸せを実感しながら，将来にわたり
  安心して暮らせる社会

- 重要となるのは，住民（日本人住民・外国人住民）の学びを支えるメンバーの力量形成

福井県の学校教育・社会教育・日本語教育及び多文化共生の取り組みに立ち会うなかでみえてきたこと

2014年2月実践研究福井ラウンドテーブル



世代，分野，地域等が異なる４～5人の小グループ

実践記録をもとに，60分もしくは100分の時間をかけて**実践を語る・聴く**

実践者の長期にわたる成長を支える学習コミュニティの存在

学校教育における取り組み

- 教師の職能成長を支える教員研修

  初任者研修から管理職研修まで，**実践の語りと傾聴**が研修の中核。

  2022年7月の教員免許状更新講習の発展的解消後は，新たにデザインされた「中堅教諭等資質向上研修・40代研修・50代研修」において，世代，校種，職種，地域を超えた協働探究が組織され，専門職としての**教師の生涯に渡る成長**を支え続けている。

- 外国人児童生徒等教育連絡協議会（年３回）

  学校教員，教育委員会メンバー，日本語支援員，アクセスワーカー，国際交流協会スタッフ，公民館職員などが参加。事例検討と，**世代・校種・地域・国籍を超えた小グループでの語り合い**に取り組んでいる。

社会教育における取り組み

- 福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」（2011年度～2012年度）
- 福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」（2013年度～）

地域の多様な世代の暮らしと学びを支える**公民館職員の長期に渡る力量形成を支える**２年間のプログラム。公民館の意味・職員の役割・実践の展開を問い直す協働学習が長年に渡り取り組まれている。*2024年度は休講

- 北陸地区社会教育主事講習（2020年度～）

福井県，石川県，富山県の公民館職員，学校教員，教育委員会メンバー，NPO職員，起業家，学生らが参加。講習は小グループによる協働探究を基軸としており，修了生（＝社会教育士）がファシリテーターとして参加するなど**世代継承のサイクル**が生まれている。

日本語教育と多文化共生における取り組み

- 外国人児童生徒等教育連絡協議会（2022年度～）と，日本語指導アドバイザー制度（2022年度～）制度

  学校拠点で地域の学校を支える仕組みとコミュニティの立ち上げ

- ふくい多文化共生推進ネットワークミーティング（2021年度～）

  多文化共生の地域づくりを行う行政機関や教育機関，民間団体等がつながり，情報共有や課題解決に取り組む。年１回の対面開催から，現在は年複数回のオンラインミーティングを実施し，ネットワークメンバー間のつながりを広げ，深めている。

住民の学びを支える私たちの学びのあり方を再考する

- 多様な文化の共存と共生は，息長く，長期的な展望が必要となる課題
  ＝民主化へのプロセスそのもの

- 学びの転換と，それを支えるコミュニティを長期的に培っていくこと

中嶋貴美江さん（元福井市東郷公民館主事）

「住民の学び合いを支える側の公民館主事として，この積み重ね合う学び合いの体験は，地域の公民館活動の大切な土台となり，まずは，地域住民の声に耳を傾ける，いつでも寄り添うことの大切さを実感していくことに繋がり，そこから住民同士による地域課題，生活課題の気づき合いとなり，住民自治によるコミュニティ活動へと広がっていく展開に結びつくと言えます。」（中略）「急激な世相の変化，社会生活の多様化の中で，地区公民館としての果たすべき役割は何であるのか，また地区住民の基本的な願いを実現，継続していくためには，何をねらいにした活動を進めるのかを，見つめ直す場や学び合う機会の研修が不可欠となってきています。」

（「『つむぎの会』での学び合うコミュニティの実践」『学び合うコミュニティを培う　第１年次報告書』2012 より）

多様なメンバーとの協働省察の提案

- 時間をかけて実践を語る（深く聴いてもらえる）ことで，これまでの試行錯誤のプロセスが跡づけられていく
- 互いの実践が照らし合わされることで，自身の/地域の実践の特徴や課題が（自分のことばで）捉えられるようになる
- 自身の実践の展望が（自分のことばで）掴めるようになる
- お互いの取り組みと省察が［**多文化共生に向かう**］共有の知恵となる